第２回　府立高校の在り方ビジョン（仮称）検討会議　（概要）

１　日　　時

令和３年６月 29 日（火）午前 10 時～正午

２　場　　所

京都産業大学むすびわざ館　３－Ａ（３階）

３　出 席 者

○委　　員　８名（欠席２名）

○教育委員会　橋本教育長、木上教育次長、山本教育監、大路管理部長、吉村指導部長、相馬高校改革推進室長、石澤総務企画課長、平野管理課長、村田高校教育課長、坂田高校改革推進室参事　ほか

４　概　　要

○事務局からの資料説明および質疑応答

○協議

◆：座長　　○：委員　　□：教育委員会

■事務局からの資料説明

■質疑応答

○中期選抜で定員割れしている学校で、受検者全員が合格しているという現状があるが、しっかりと試験も行った上で、全員が合格しているという認識でよいか。

□中期選抜については、学力検査と中学校からの報告書をもとにして選抜を行っている。

○資料９は文部科学省の調査によるものだが、京都府単位で類似の調査は行われているか。

□京都府としては、直近では選抜制度を見直した平成 26 年度に「選抜制度に関わるアンケート調査」をしたことはあるが、それ以降については行っていない。

○資料７にある「特色化推進プランの施策化」における学校間連携などについて、もう少し説明してほしい。

□府立高校を大きく４つのグループに分けている。グループごとに、年に１回、各学校によるプレゼンテーションや交流の機会を持っている。また、国の事業指定などを受けている学校が、研究発表の場などにグループ内の学校等を招き、成果を見ていただくというようなことも実施している。

◆京都府の選抜制度は複雑であり、その日程や概要について、私立の動きも含めて説明願いたい。私立高校を合格したことなどによる、公立高校の前期選抜受検辞退はあるのか。

□例年２月 10 日を基準日として私立高校が入試をされている。京都府の公立高校の前期選抜は、２月 16 日を基準日として実施している。前期選抜は、受検機会を複数化して多元的な評価尺度による選抜を行うというもので、学科ごとの方式、募集割合、検査項目等の実施要項は各学校で定めている。学力検査、報告書、面接、作文、活動実績等で選抜を行うＡ方式、学力検査を行わないＢ方式、実技検査を実施するＣ方式の３つの方式がある。前期選抜の募集人員は、募集全体の 45%程度になる。それ以外にも前期選抜と同時期に特別入学者選抜というものを実施しており、海外勤務者帰国子女、中国帰国孤児子女、成人、長期欠席者、清明高等学校等の入学者選抜も行っている 。私立高校の合格発表が、前期選抜の試験日より前にある。志願者数に対する受検者数については、資料４を参照いただきたい。前期選抜の受検辞退については、資料にあるとおり 370 名程度はある状況である。

中期選抜は３月上旬に実施しており、学力検査は、国語、社会、数学、理科、英語の５教科の共通問題である。それに中学校からの報告書を合わせて、総合的に判定している。他府県と若干異なるのは、第一志望の中に第一順位校と第二順位校を設定しており、まず第一順位校で全体の 90%の合格者を決定した上で、残りの 10%については、第一順位と第二順位、あわせて判定をするというような方法をとっている。その上で第二志望まで書くことができるので、第一志望不合格であった生徒であったとしても、第二志望校で合格するということもある。ステップが何段階かに分かれているので、複雑な制度とも言えるが、できるだけ公立高校に合格をしてもらえるような制度設計にしている。

後期選抜は、中期選抜までで欠員があった学科について、さらに募集をする必要があると判断した場合に実施するもので、３月の下旬としている。加えて通信制については、後期選抜を実施後の３月下旬に選抜をしているという状況である。

◆前期選抜で倍率の高い学校があるが、募集人員は増やせないのか。

□普通科の前期選抜では、京都市乙訓地域は募集定員の 30%、それ以外の地域では 20%としている。全体の募集定員は、その年度の中学校３年生の人数と、またその前年度、過去数年間の生徒の進路希望状況などを見て、各学校の施設設備の規模についても考慮をしながら設定をしている。

○「特色化推進プランの施策化」で、４つのグループのうち「京都フロンティア校」が一番大きな集団となっているが、このグループ化によって何か変化が起こったのか。また、どう評価しているのか。

□府立学校間の横の連携というものを重視していきたいというねらいで、このようなグループを設定している。自校の取組だけでなく、他校での取組も知ることによって、生徒たちの学びが深まるということや、互いに刺激になるということもある。連携をすることによって、各校の取組の深まりや、研究活動の活発化というようなところは見られており、一定評価している。

□交流の場を設けて、それぞれ発表するという形にはなっているが、もちろん普段の取組があっての成果の発表の場である。例えば、「グローバルネットワーク京都校」においては、ＳＤＧｓといったテーマを取りあげるなど、各校が継続的な取組をしており、発表内容の高度化が見られる。また、生徒のみならず、それに関わる教員がこのネットワークの中で資質能力を高めていくという機会にもなっている。グループの設定や学校数のバランスなどについて、特色が見えにくい部分などは今後検討していくことも必要だと考えている。

■協議（主な意見）

◆府立高校のスクールミッションの基本になる考え方について、検討の主な観点も参考にしながら、ご意見をいただきたい。

○義務教育ではないとしても、高等学校も多くの生徒が学んでいる。多様な生徒が学べるシステムがさらにあってもいいと思う。不登校の生徒、学び直しが必要な生徒、様々な支援の必要な生徒などが、しっかりと学べて社会に出て行けるというようなことを意図した高校がもう少しあってもいいと考えている。

○それぞれの居住地からの通いやすさを考慮した普通科と、地域産業と密接した専門学科の併設は、とても大事で魅力的なものがあると感じている。ただ、交通網の発達等もあり、その配置について考え直す余地があると感じている。

○京都府立高校の新入生にアンケートを行うことを提案したい。修学支援制度ができたことで経済的な負担が減るから私立高校を選択する理由は分かるが、その後もずっと私立高校志願者は増え続けている。公立高校を選択する生徒が減少し続けているとも言える。生徒のニーズの視点から調べるために、アンケートは必要だと思う。文部科学省が行ったような、「在籍する高校を選択した理由」といった項目については、学費、自分のニーズに合っているか、施設などといった項目も入れることが必要であると思う。また、学校の満足度についても尋ねたい。先日の新聞報道に、大阪のある府立高校が３年連続で定員割れをしているので再編整備の検討対象になっているが、生徒に寄り添う工夫をされていて、2020 年度の在籍生徒の学校満足度は 90％と非常に高いということが載っていた。京都府についても、今後定員割れをしている学校の再編整備のような話になるかもしれないが、定員割れだけを理由に生徒の満足度の高い高校を閉じてしまうのはよくないのと思うので、満足度についても調べたい。また、定員割れをしているが満足度が高いという学校は、生徒にとって魅力的なことをされていると思うので、ぜひ学校訪問をしてその特徴を探りたい。

○京都府立高校の役割についてだが、2021 年の中教審答申では、高校には高等教育機関や実社会への接続機能を果たすことや、生徒が主権者としての自覚を深めていくための学びをさせることが求められている。また、高校には、学力の保障機能だけではなく、福祉的機能、社会的機

能も必要だと述べられている。福祉的機能には「安全・安心な居場所の提供」と示され、社会的機能には「社会性・人間性の育成」と示されている。また福祉的機能というのは、例えばスクールカウンセラーや学校の担任の先生などが、一人一人の声を聞いてあげて、「僕・私はここにいてもいいんだ」というような居場所が学校にあるということだろうし、社会的機能というのは、学校の教科・授業だけじゃなくて、行事、生徒会活動、部活動など様々な活動の中で人間全体として育んでいくということだと思う。府立高校では、多様な学びができるということを大事にされている。学力保障機能だけではなくて、公立の学校として、子どもたち一人一人を取りこぼさないように、福祉的・社会的機能の面で頑張っている高校もあると思うが、例えば『スクールガイド』でも、福祉的機能や社会的機能については、保護者や中学３年生がわかる形では十分に示されていないのではないかと思う。大学入試の合格実績など、目に見えやすい学力面だけではなく、福祉的機能や社会的機能が優れている高校のグッドプラクティスとして、生徒一人一人に寄り添う仕組みがあるとか、学校行事の中で具体的にどういうものが育っているのかという情報も発信してはどうか。

○学力イコール大学合格実績という印象があると思うが、学力保障の指標として今までのように大学合格実績だけではなくて、府立高校の良さが示せる学力保障の指標をつくるべきではないか。どの高校に行っても基礎的な学力が身につくということが１つの考え方だと思う。中長期的な課題として、例えば「京都バカロレア」のような名称のものを作っていくということも考えられる。大学入学共通テストがあるが、それは大学教員が集まって、各分野に沿って作っている試験なので、高校の試験ではない。高校の教科書に載っている例題のレベルの問題が解けるか、基本的な文章が読み取れるか、一部の範囲ではなくて全範囲において、本当に高校３年間で学んだ基礎的なことが理解できているかなどを問うものとして、高校３年生の時に実施するイメージである。その問題は、京都府立高校の先生を中心に、指導主事などが支援して、記述方式では大変だと思うのでマークシート方式で作るようなことも考えられる。バカロレア試験の場合は半分の点数で合格になるので、例えば 100 点中 50 点以上が合格として、合格したら京都府教教育委員会の認定の資格として履歴書に書けるようにする。ただし合否は高校卒業とは関係ない、というようなものを考えた。そういった取組によって、生徒は大学入試を受けることを目的とするのではなくて、高校３年間で基礎的なことを学ぶことを目標とできるし、合格したら嬉しいと思う。履歴書に書けるのであれば、それがすぐに大学入試に有利になるということはなかったとしても、基本的なことが身についている学生は大学側も求めているだろうし、就職する上でも有利になると思うので、長期的には評価されていくのではないか。府立高校として勝負できる指標を作る、それを目に見える形で示す、これまでのルールを変えていくというようなことも考えてもいいのではないか。

○基本的に府立高校全体として、多様な生徒が学べるということは大事だと思う。基礎学力をつけるというのはどこの学校でも同じだと思うが、以前と違い、例えば学力の高い生徒がたくさん入学している学校など、各学校に一定の学力層の生徒が集まっている状況はあると思っている。入試制度の影響もあってそういう状況になっているようにも思う。高校として、それぞれの生徒にどこまで力をつけさせるかということについて、広報していくことは大事だと思う。

○府立高校は、それぞれの地域に学校を置いているので、近くの中学生に選んでもらえるような学校づくりというのは、実は一番大事だと思う。地域の方々には、学校の生徒の様々な面が見えるので、そういう意味では地域から敬遠されてしまうような学校づくりではよくない。各学校において、広報をしなくても、見えてしまう部分をきっちりできる生徒を育てるというのは重要であると思う。

○学校説明会で、保護者の方が「やっと見つかった」と言われることがよくある。「質の高い文武両道」を掲げた高校では、部活も勉強も頑張るという形で、学校行事もしっかりと取り組んでいる。そういう各学校の特徴を、見える形でつくる必要はあると思う。今回の検討の主要な観点として、例えば「Society5.0」や、「探究的な学び」、「地域に根ざして」、「教員の資質能力向上」などが示されているが、これについてはやはり各校の校長が、意識をさらに高めて教育を行ったり、教員の資質能力の向上のために研修を行ったりといったことが基本ではないかと思う。また、それに向けたアシストとして、教育委員会側での何らかの取組もあるとは思うが、基本的には各学校の校長レベルのことと思う。

○中学生には高校選択をする際に、目的意識を持って選んでほしい、というふうに思っている。卒業後の人生を決める高校３年間で、どういうことをしたいのかということをしっかりと見極めて進路選択をしてほしいので、高校には「卒業段階までにこういう力がつく」というようなことが中学生にしっかりと伝わるように広報してもらいたい。

○府立高校には、中学校にない魅力的な施設設備もある。府立高校は生徒の憧れの場所であってほしいし、スポーツや理科などの設備が整っているといったことも志願のきっかけになるのではないか。人材育成への投資として、施設設備への予算措置も考えることが重要であると思う。

○地域の方々と関わることによっていろいろなことを教えられたり、あるいは褒められたりというようなことが、生徒の自己肯定感にもつながっていく。地域の方々と接するといった取組も、府立高校ならできるのではないか。

○中学校段階でつけるべき学力がしっかりと定着していない子もいるが、そうした生徒も高校に行きたいという思いは持っている。そうした生徒を受け入れて社会に出る力をつけてもらえる高校でもあってほしいと思う。入学した生徒をしっかりと卒業させるというふうに努力していただいた高校については、中学校現場では感謝をしている。

○中学校での教育というものを、高校の先生も知ることが重要であるので、中高連携をもっとしっかりとしてはどうか。どういう教育内容を学んでいるのか、どういう生徒指導をしているのか。新しい学習指導要領の基本的な考え方でもあるので、授業観や指導方法が異なる校種間でお互いを知ることは大切であると思う。

○教育分野の研究の視点で言うと、私学側にある程度予算措置をしているということは、私学も

実質的には公立としての役割を担っているのではないか。これを政策的にどのように見るのか、という視点もある。京都府の教育施策として、その点をどう考えるのかということは問われているのではないか。

○各府立高校の魅力がどれだけ中学生に伝わるか。「伝えるか」ではなくて、「伝わるか」というところが一番大事である。しっかりと伝わらなければ、生徒募集の面では厳しくなっていくと思う。大学においても、中退問題は大学だけでは完結をしない。いわゆる不本意入学を防ぐためには高校との連携が必要であるということと同様に、高校においても、中学校と府立高校がどのような連携を図るのか、中学校の先生と高校の先生がどのような対話の機会を持つかが重要である。

○公立高校と私立高校とでは明らかにミッションが異なる。私学には建学の精神がある一方で、公立は地域人材をどう育成するかがミッションだと考える。しかし、基礎自治体である市町村には高校に関する窓口がないという現状である。各首長の理解の下に、市町村に担当部署を作ってもらうのも良いのではないか。市町村では、人口減少問題が喫緊の課題で、例えば丹後地域では18歳で地元を離れた後、半数程度しか地域に戻ってこない。この部分に自治体としてしっかり手を打ちたいというニーズがあるので、高校の支援者になってもらうという視点も大事ではないか。府立高校においては、教職員の人件費は当然府予算で見るべきだが、高校教育の魅力化のために必要な教員ではない人材、例えば、国の地域おこし協力隊の制度を活用した、与謝野町や京丹後市に置かれている高校生と地域の架け橋となるコーディネイターのような人材の配置は市町村が行う、といった取組を、府立高校の標準装備のようにできないか。基礎自治体の予算については首長側に権限があるので、そういった視点から市町村側に府教委からもアプローチをしてはどうか。ただ市町村との連携については、府内すべての地域でこうしたことが可能か、必要かということについては議論が分かれると思う。まずは北部モデルとして、丹後・中丹地域の全高校で試行実験するといったことも考えられる。その良さが見えれば口丹以南の地域でも声が上がるのではないか。ニーズを感じないと活かせないので、こういった点については地域事情による格差があっても良いと思う。

○多様な経験や出会い、気づきが生徒の成長に繋がるので、府立高校というスケールメリットを生かして、一定の学校をグルーピングしてその中で学校間連携をすることも大切だが、あえてその垣根を越えて連携や交流をするということも大切ではないか。一緒に取り組むところには府教委側で予算的にも支援をするといった施策があっても良いと思う。さらに、カリキュラムの整理をした上で、一定の期間、単位認定を前提として、府立高校間で留学する制度を作るというようなことも考えられる。１年間では長すぎるなら、１週間でも１ヶ月でも良い。交換留学をすることで他校の良さを知ることもあるし、生徒の視野も広がるのではないか。その部分について、現場の先生たちからアイデアを出して、府教委が応援していくということも良いのではないかと思う。

○府立高校については、「地域」がキーワードになる。南部地域の生徒と北部地域の生徒が交流することなども、次年度から全校配備となる１人１台端末の環境が整えば簡単にできるように

なるのではないか。また府立高校については通学範囲が広範囲なので、１つの学校の中にも様々な地域から来ている生徒がいる。そうした生徒同士の交流によって、知らないことを知っていくということが知的好奇心に火をつけることにもなっていくと思う。それが１つの高校に多様な地域から通っているメリットでもあると考える。

○高校生段階での魅力のある大人との出会いが、生徒の成長を促すと思う。例えば北部のある府立高校では、土曜日に教員が自分の探究活動の成果を発表する機会を作っている。生徒は自由参加だが、教員自らが探究した楽しみや達成感を、参加した生徒や教員が聴くという取組である。普通の授業では教えられる内容は変えられないけれども、探究は自由で何を話してもよいという良さがある。例えば、「京都府立高校の先生は１人１研究します」というようなことを京都モデルとするといったことも考えられる。生徒と教員が一緒の眼差しで発表し合うという学びのコミュニティができると、ワクワクするような教育が展開できるのではないか。

○大学と連携することで、「総合的な探究の時間」の伴走を大学がすることができると思う。特定の大学との連携ではなく、高校のスクールミッションに応じて必要となる分野の大学教員等をマッチングすることが良いと思う。その架け橋を府教委が行うこととして、本庁だけでなく、地域の実情をよく知っている各教育局に、現場のマッチングをしてもらうようなイメージである。大きな方向性や予算的な支援は本庁でコントロールする、というような取組も面白いのではないかと思う。

○高校の特色化と相関する、教職員の人事異動や人材育成についてだが、20 世紀の教員は、いろいろなことを体感し経験し、いろいろなことに対応できる人材、「ゼネラリスト」であることが求められていたが、これからは「スペシャリスト」が求められると思う。府立高校の特色化推進プランを例にとると、「グローバルネットワーク京都校」に属する高校間での人事異動など、自分の専門性をとことん磨かせる、そういう人事異動も必要ではないか。また、評価制度において、熱意ある先生が報われる仕組みはとても大切であるが、民間の評価とは絶対に合わないということも理解しておく必要がある。教育の成果は目に見えないものなので評価にはなじまないが、評価に至る間の管理職と教職員の対話にこそ意味がある。教員の幅広い交流ということでは、学校間で授業参観をするということも大切ではないか。オンラインの活用によって、南部と北部の教員間の交流もあり得る。そういうことが数のある府立高校の強みになるのではないか。

○私は芸術系の高校の出身だが、高校に見学に行ったことが、学校や専攻を選択するきっかけとなった。そこで体感したこと、味わった雰囲気が高校選択の理由となった。そこから学習にやる気を出して、受検に臨むことができた。小学校以降、うまく自分を出せない中で、初めて可能性を見つけたいと思ったこともきっかけだったので、地元の高校に行くという頭が逆になくて、変わりたい、変わった自分で新たな環境に飛び込みたいという思いをもって高校を選択した。１人の子どもの成長を見たときに、そういったチャンスも高校受検においてはあると思う。ただ、地元で育った子どもたちが地元の高校を巣立っていくのが地域の方の喜びの１つであるというのも、良いことだと感じている。

○学校の魅力、雰囲気、先生の魅力、また生徒たちの生き生きしている目といった、学校見学などを通して「肌で感じる」という部分も大切にしながら、学校選択をしていくことが重要であると思う。地元の高校でいいというのではなく、自分に合った高校との出会いのチャンスというものを作ってやることが、やる気にも繋がると思う。そういったことからもアンケートを行って高校生の生の声を聞くことによって、根拠に基づいた議論ができると思う。高校での自己肯定感や自己実現という側面にも焦点を当てていきたいと思う。

○選抜制度の見直しによって、以前は地元の子は地元の高校にという形だったのが、どこでも自分の行きたいところを選択できるようになった。こういうことをやっている高校とか、自分が興味のあるところに思い切って自由に受検ができる制度になったというのは、子どもたちにとって可能性を広げることになったので、良かったと思う。

○府立高校において、英語に特化している学校や、理系に特化している学校が、その大きなグループ分けの中で連携し合えるというのは、府立高校ならではの魅力だと思う。またその中で、教員の連携も行っていることは、素晴らしい取組だと思う。そういった取組をもっと進めてほしいと思う。

○今、本当に何が起こるかわからないような時代だが、子どもたちにとって本当に大切な３年間において、学びがストップしてしまうようでは困る。高校でも、１人１台端末の準備が進められており、例えば学校に行けないような状況になっても学習が続けられるという環境作りを、早く実現してほしいと思う。

○地域との関わりでは、中学校や小学校なら、体育館などの学校施設を地域の方の生涯スポーツなどに開放する仕組みがある。高校でもそういう取組を行うことで、地域の方に高校に興味を持ってもらったり、地域との連携を深めたりできるのではないかと思う。学校をあげてこの時間は地域のクリーン活動に参加するといったボランティアなど、授業以外での福祉的な活動や、人の役に立つというような経験を行うことも良いと思う。

○教員の資質能力の向上に関しては、部活動を教員ではなく、専任の方に指導していただくということが進められていると聞いている。 教員が土日も休み無しで、部活動で生徒を見ているという現状が少しでも改善できれば、教員が自分を高めるために時間が取れるようになって、資質向上にも繋がっていくのではないかと思うので、そういった取組も進めてほしい。

○高校と地域との繋がりは本当に大事なことだと思う。地元の高校生たちがどのような学校生活を送っているのかということは、地域の方々には非常に関心のあることだと思う。生徒たちが頑張りを見せる場面がたくさんあるといったことも非常に大事なのではないかと常々思っている。そういったものをいかに構築していって、大学進学などで他府県などに行ったとしても、最終的に地元に帰ってきて、その地元のために頑張ろうというふうに思ってくれるような子どもたちを育てていくことが、長期的には大事なのではないかと思う。

○資料９の、子どもたちが在籍する学校を選択した理由の「自宅から近い・通いやすい」、「学校の雰囲気が良かった」、「合格できそうだった」というのは、やはり子どもたちは正直だと感じた。近くて通いやすいということは、地元の学校を選択するということになると思う。実際に京阪電車・ＪＲ沿線にある中学校の生徒は、自転車で通える、もしくは京阪電車でアクセスが良いなどといった高校を選ぶという傾向にある。近鉄電車沿線にも多数の公立高校があるが、そちらはほとんど選ばれない傾向である。やはり通いやすいということは大きいと思う。子どもたちの時間が確保されるということだと思う。そういう意味で、本当に正直なアンケート結果を見て、やはり地元に根ざしたというところが大事になってくるのではと思った。

○同じ市内での小中学校連携は非常に深い関係にあるが、中学校と府立高校との教員間の連携などは、なかなか距離があるような感じがする。今のコロナ禍では難しいと思うが、中高の生徒同士の交流によって、「こんなに頑張ってるんだ」ということを先輩の高校生から後輩の中学生に話をしてくれると、憧れや関心が生まれ、それが１つのきっかけになって、その学校の説明会に行こうという意欲にも繋がっていくと思う。府立高校において説明会をされるが、通いやすさを重視する中学生たちは近い学校だけでいいと言って、なかなか多くの高校の説明会に参加しようとしないこともある。積極的な学校選択となるように、高校と中学校との間で、中学生に伝わるものや、何かを得られるきっかけが作れるといったことがあれば、うまく連携していけるのではないかと思う。

○選抜制度についても、中学生の希望が叶うようにいろいろな工夫がなされていると思う。「特色化推進プラン」など府立高校が頑張っていることをもっと発信することが重要だと思う。子どもたちがスマートフォンで府立高校の情報が見られるというような状況になれば、もっと身近に府立高校を感じることができるのではないか。公立高校もたくさんあり、私立高校もあるので、中学校の教員がすべての学校のことを理解して、保護者面談することなどは非常に難しい。選抜制度も複雑であり、高校選択に必要な情報は非常に多様なので、例えばメディアやICT などを介して、手軽に子どもたちや保護者に府立高校の情報が入るような仕組みが必要であると思う。

○京都府の高等学校教育のあり方ということだが、そんなに大きく、いきなり 180 度舵を切ることはできないと思う。学校の中では何が重要なのかと考えると、多分フォーカスすべきは、教えるもしくは学ぶということなのだろうが、 それだけでは息が詰まるし、当然、遊ぶということや、コミュニケーションという視点も必要だと思う。学ぶということに焦点を当てて、高校の特色を出す、それも１つの方策だと思う。体育祭、文化祭といった行事も、おそらく高校の特色を出すということにおいては、極めて重要な役割をするのではないかと思う。自分の子どもは３人とも全然違う高校に行ったが、学校選びの視点が何だったかというと、文化祭だった。教育というのはいろいろなものを包摂しての教育なので、教科書だけにフォーカスしていたのでは少し違うと感じている。

○『LIFE SHIFT』という有名な本があるが、人生 100 年時代と言われる中で社会に出て何が重要

になるかというと、おそらくは学び続けるということではないかと思う。社会に出てから何かに気がついて、そこで学ぶということに思い至って自分で勉強をしていく、という力をどうつけてもらうかというのが学校なのかなと思う。職業教育、グローバル化やスーパーサイエンスなど、あるテーマで勉強している中で、その勉強する仕方であるとか、思考のもっていき方であるとか、「学び方」をいかに学ぶかということが非常に重要なのではないかと思う。そういうことを高校で身につけてほしいと思う。いわゆる教科書を読むだけではなくて、文化祭で友達と、どういうテーマで何を作って何を発表するか、地域の人たちや近くの中学生に来てもらうにはどうしたらいいか、そこで自分たちは何をプレゼンしていけばいいのか、ということを考えるのも、教育の１つなのではないかと思う。

○好きなことを単にやらせるということだけではなくて、基礎的な学力というのは当然必要になってくると思う。高校を卒業して、仮に就職した場合、学校で学ぶ基本的な知識などが身についていないといけないと思う。ある大手メーカーでは、会社にいる時間の 20%から 30%は上司に許可をとれば何でも好きなテーマで研究をすることができる。一方、その代わりに目標管理において厳しく業績を求められる。好きなこともできるけれども、結果を求められる。学校に置き換えると、好きなこととして、例えば文化祭や部活動を一生懸命やることができる一方で、基本的な学力を身につけていくということについても、きっちり押さえないといけない。自由なこと、好きなことをやっていれば、３年間それだけで終わってしまうということを、しっかりと教えていくステージも必要なのではないかと思う。

○今回のビジョンの検討においては、例えば「スーパーサイエンスペシャルネットワーク」などという縦軸に対して、「地域」といった横軸があり、３次元軸として時間の流れ、少子高齢化などといった社会の変化をどう考えていくかというような視点が必要なのかなと思う。

◆高校というのは、大学に進学するための手段だけではなく、高校生活自体が、何か意味があり、目的のような気がする。

◆全体意見を通して、共通する１つ目は、公立である府立高校には多様な役割が求められているということ。まず当然、教育的な使命があり、それに加えて福祉的な使命がある。３年間自分が居場所として通えるところがあるという意味だと思う。そして、地域社会を支えるという社会的な使命があると思う。

◆２つ目は、多様なニーズに対応することの必要性があるということ。例えば、難関大学への進学を希望する生徒もいれば、就職希望の生徒もいる。学び直しの生徒もいれば、ソーシャルスキルトレーニングが必要となる生徒もいると思う。そういった様々なニーズに対応する存在として高校が必要である。それと同時に、京都府の場合は北部と南部とで大きく地域事情が異なるので、横長の同質的な生徒が集まる高校と、縦長の学力層というか、地理的な要因から地域内のさまざまな生徒を受け入れる高校との違いといったことも、多様性の１つだと思う。

◆３つ目は、多様な活動があるということ。メインはやはり勉強だが、いろいろな県の公立高校

を見ていると、公立の良さというのは、昔風に言うと「文武両道」である。 勉強が中心になっていて、部活動もやる、行事もやる、探究的な学習やグローバルな取組もやるというのが必要なのだと思う。「文武両道」と言うと、勉強と部活動ということになるが、他県の元教育長は「三兎を追え」という言葉を使われた。「文武」だけでは足らない、勉強と部活動と行事の３つであり、その３つを「つかめ」とは言わず「追え」と言っているというのがポイントだと話しておられた。公立高校の生徒の良さというのは、そういった多様な活動を追いかけた成果であると思う。その１つは非認知能力だと思う。いわゆる粘り強さとか、我慢強さとか、努力の大切さを学ぶことにある。もう１つは学習方略、学び方を学ぶということ。そういう意味で、生徒たちがこの多様な活動のいくつかを追いかけるというところが、府立高校の役割の１つというように思う。

◆４つ目は、多様な学校のスタイルが必要だということ。普通科の 10 クラスぐらいの学校も必要であれば、学び直しのための多部制の定時制で、４クラスくらいの小さな学校も必要である。キーワードとするならば、「多様性に対応」と言えるのではないか。 京都府というのは、これまで総合選抜の時代が長かった。多様というよりも、各校が均一的なレベルでやっていこうという意識が強かったように思う。ただ急には変わらないので、そういうことも意識した形で、府立高校全体を設計していくことが重要だと思う。そのためにもアンケートは有効であると思うし、エビデンスが欲しい。いろいろと質問項目を工夫して、今の高校生たちにはこういうニーズがあるのか、こういったことを求めているのかというところを知った上で、ビジョンに向けた意見を出していきたい。

◆今回提案のあった府立高校生へのアンケート調査の実施については、座長と事務局において調整し、進めることとさせていただく。（異議なし）